

人形姫

山本幸久

第六回

6

「すごい」「カワイイ」「じょうず」「すてき」「しんじらんなあい」

十二人の子ども達の目は、溝口真純みぞぐちますみの手元に集中していた。まさしく二十四の瞳だ。彼女は雛人形の頭に顔を描いていた。

「いくらおだてたって、なんにもあげないわよ」

溝口がおどけた口調で言うと、子ども達はうれしそうにはしゃいだ。ふだんは眉なら眉、唇なら唇だけと、それぞれのパーツをバラバラに描く。そうすればいちいち筆を変える手間を省け、効率的だからだ。だがいまは雛人形一体がどうやってできていくのかを、子ども達に紹介するため、頭ひとつを最後まで仕上げてもらおうことにしたのだ。

雛祭りを三日前におえて、今日は三月の第一水曜だ。森岡人形には三十数人の子どもが見学に訪れている。歩いて十分足らずの小学校に通う五年生で、三クラスあるうちの二クラスだ。他の二クラスはべつの人形の会社を見学している。いずれの会社も森岡人形と変わらぬ広さというか狭さなので、一クラスが限度なのだ。さらに森岡人形ではそれを三班に分け、一班一フロアを順繰りに、各々十分分ずつ見学してもらう。

この時期の恒例行事だが、いつからはじまったのかまではわからない。じつは恭平や弟の慎次しんじの母校で、恭平が通っていた頃にはすであつた。そのときには担任の先生の配慮で、よその人形会社へいったのだが、それにしつって自分家とやっていることはさして変わらず、目新しいことはなにひとつなかった。

今日はまず恭平が小学校へでむき、講堂に集まった五年生三クラス全員を前に、日本人形のつくり方について、簡単なレクチャーをおこなった。五代目を継いだときに、鐘撞人形かねつき共同組合に、これは森岡人形さんの役目なのだと言われたのだ。

言われてみればたしかに自分が小学生のときに、四代目の父が講堂で話していた記憶はあつた。こんなことまで世襲制せしゅうにしなくないのではないか、と思つたものの、断るほどのことでもないと思つた。引き受けたが最後、以来ずっと恭平の役目となつてしまつた。

毎年おなじことを話すだけである。なのにいまだに慣れずに緊張してしまう。子ども達がおとなしく聞いてくれるのはいいのだが、はたして自分の説明が通じているのかどうか心配になるのだ。今年もそうだった。ただしおわたたあと、「社長さんは話がじょうずなんです」と溝口真純に言われたので、多少は安心できた。彼女にはプリントの配布やスライドの操作をお願いしたのだ。

「訊きたいことがあれば、なんでも質問してちょうだい」

溝口は自分を囲む子ども達にむかって言った。ただし顔を上げず、筆を休めようもしない。

「この頭をつくったのもお姉さんですか」

溝口のすぐ横にいた女の子が訊ねる。

「そうよ。木彫りの原型はべつの職人さんだけだね。抜型に桐塑とうそを生麩糊しよふくで練ったものを押し込んで、固まったら抜きだして、磨きをかけて、目玉を入れて、胡粉こふんと膠にかわで下地塗りをして、目鼻をおなじ材料で盛り上げていって、ここまでしたのは私」

「ここで働きはじめて、どれくらいですか」別の女の子が訊いた。

「五ヶ月くらいよ」

「たった五ヶ月で、ここまでできちゃうの？」これは男の子である。

「ヤバくね？」

「このひとは特別さ」子ども達のうしろから恭平は言った。右手に

小型のビデオカメラを持ち、子ども達の見学風景を撮影していたのである。「美術大学の大学院生だね。もうじき卒業なんだけど、そこで人形の勉強をしていたんだ」

これは正しくない。溝口は彫塑が専門で、雛人形をつくったのはほとんど趣味と言っている。しかしその出来は職人達を唸らすほどであった。溝口自身はとくに訂正することなく、作業をつづけている。

子ども達の前での実演は、去年まで恭平がおこなっていた。デパートの製作実演とおなじく、宮沢だと酒臭いときがあるからだ。そもそも彼は一ヶ月半ほど前に東京駅で倒れて怪我を負い、自宅療養中だった。峰三郎は子どもの前であっても緊張で手が震えてしまう。

溝口がすることに決まったのは昨日だ。あたしがやってもイイですかと彼女が申しでてきたのである。恭平としては願ったり叶ったりだった。峰三郎ほどではないにせよ、人前で作業するのは苦手ではあったのだ。聞けば溝口は大学で教職課程を履修し、教員免許こそ持っていないが、中学校へ教育実習にいったこともあるらしい。あたし、子どもが好きなんですよ。

溝口の言葉に嘘はないようだった。子ども達に囲まれた彼女は、作業をしながらもどこか楽しげだ。まさしく『二十四の瞳』である。

「いつから人形をつくる職人になりたいと思っていましたか」

ふたたび溝口のすぐ横の子が訊ねた。

「あなた達くらいときかな」

「ええええええ？」と十二人の声が揃う。

「どうしてそう思ったんですか」

またおなじ子だ。そのとき恭平は、この子の顔に見覚えがあるのに気づいた。しかし小学五年生の女子が知り合いのはずがない。テレビで見た子役のだれかに似ているのだろうか。

「あー、お姉さんがいるんだけど、雛人形が姉妹ふたりで一セツトだったの。でも元々お姉さんに買ったもので、あたしとしてはやっぱり自分のが欲しかったのよね。それでいつか自分でつくろうって思うようになったの。ちなみにその雛人形は、ここ森岡人形だね。結局は結婚したお姉さんが持ってっちゃったわ」

「ヒドオオオオい」「わかるそれえ、ウチのお姉さんもなんでも自分のモノにしちゃうのお」「あたしはお姉さんだけど、そんなことしな
いわっ」

「はい、他に質問はありませんかあ」

溝口の一言で、ざわつきだした子ども達は一瞬にして静まった。

見事なものだ。それこそ先生のようにだった。

「はいっ」眼鏡をかけて、いかにもガリ勉風の男の子が手をあげた。

「月にどのくらいお金がもらえますか」

「答えていいですか、社長さん」

溝口は手を止めて顔をあげると、恭平のほうを見た。二十四の瞳も一斉に恭平にむく。

「いや、まあ、彼女の場合はまだ正社員じゃないんで、それほどではないけど、でも食うに困らない程度はあげているつもりではいるんだがね」

嘘いつわりのない、きちんとした答えをしようとするほどの、自分がなにを言っているのか、恭平はわからなくなった。そんな中で溝口の口元が緩んでいるのに気づく。笑いを堪えているにちがいない。

「日本人の平均年収はだいたい四百二十万円ですが、それ以上ですか、以下ですか」

ガリ勉くんがさらに言った。その口ぶりは尋問に近い。なんと答えたらいいものか、恭平は言葉に詰まる。

「平均以上の年収が頂けるように、日々がんばっているところよ」

「そ、そうだ」溝口の助け舟に、恭平は大きく頷く。^{うなず}「彼女は我が社にとって優秀な人材だからね。今後、給料がアップしていくことは間違いない」

「他に質問あるひとお」

ガリ勉くんがまだなにか言いたげなのを、ウマイこと遮るように

溝口が言った。

「ここでは『オバケデイズ』の食玩しょくがんは、つくってないんですか」
「なに言ってるんだ」質問をした小太りな男の子を、見るからにイジメっ子の男の子が小突く。「ここは日本人形の会社なんだぜ、そんなのつくってるはずねえだろ」

他の子達がウンザリ顔になる。どうやらいつものことのようにだ。

「でも今月号の『ファイギュアキング』で、『オバケデイズ』の食玩は我が社の製品ですって、ファイギュア事業部の部長さんがインタビューで答えていたよ。そのひと、名字も森岡で」

「うっせえんだよ」「痛いなっ。なにすんだよ」

「私の弟だ」恭平が慌てて言うと、揉めだしたイジメっ子と小太りくんの動きは、ぴたりと止まった。

「雑誌のインタビューに答えていたのは私の弟、森岡慎次だ」

「そのひと」小太りくんの顔がぱつと輝いた。「今日いますか」

「ここにはいつもいないんだ」恭平は（いつも）を強調した。「ファイギュア事業部自体、東京の代官山だいかんやまという場所にあつてね。『オバケデイズ』の食玩は、たぶんそこで原型をつくって、中国をはじめとした海外の工場で、大量生産されている」

「なんだ、そうだったんですね」小太りくんは肩を落とした。そこまできっかりしなくてもイイだろと思わないでもない。『オバケデ

イズ』の食玩って、めっちゃ出来がいいんだよなあ。あれの原型が見られるかと思ってたんだけど」

「あたし、最初はフィギュア事業部でバイトしてて、『オバケデイズ』の食玩もちよっと手伝っていたのよ」

「マジですか」

溝口の発言に反応したのは小太りくんではなく、イジメっ子のほうだった。

「でも今日は日本人形について学んでもらいたいで、もしフィギュア事業部の話を聞きたかったら、べつの日にしてあげてもいいわよ。ですよね、社長さん」

「ああ、もちろん。弟には熱烈なファンがいたって伝えておくよ」
伝えることはできる。だが恭平は慎次がいま、どこにいるのかまでは把握はあくできていなかった。

「そろそろオジサンの仕事も見えてくれないかな」

背後で声があった。髪付師くさまはじめの久佐間始だ。ふりむけば、頑固一徹の職人そのものの風貌ふうぼうなのに、冗談めかした口ぶりであれしさが隠し切れないように目尻を下げて、頬が緩んでいた。

『フィギュアキング』の今月号に載っていた弟のインタビュー記事を、恭平も読んでいた。毎号、出版社から会社に送られてくる。も

とは代官山にあるフィギュア事業部に寄贈されていたものだ。

ウチんとはスタッフの大半が、発売当日に買ってくるんで、わざわざ送ってもらわなくてもいいんだよね。こっちでつくったフィギュアは毎月載ってるんで、なんだったら兄貴のほうに送ってもらおうか。社長として自社の商品を把握しておくのにいいと思うよ。

弟にそう言われたのは数年前のことだ。断るのは僻ひがんでいるように大人気おとなげないと思って承諾した。そして毎号、最初から最後までペラペラめくり、森岡人形の文字が目にはまれば、そのページに付箋ふせんを付けている。しばらくして弟が頻繁に誌面に登場するのに気づいた。二ヶ月にいったぺんくらのペースである。今月号のようにインタビューを受けることもあれば、秋葉原や池袋、お台場などでイベントをおこなった記事が写真入りで掲載されていることもあった。ネットで確認したところ、フィギュア業界で、弟は一目置いちもくかれるどころか、カリスマ的存在ですらあった。

中学高校で引きこもっているあいだ、弟は自分で書いたフィギュアの批評をほぼ毎日、ブログにアップしていた。これにファンがつき、やがて原型師をはじめとしたフィギュア制作の関係者にも一目置かれるようになり、ブログだけでなくフェイスブックもはじめると、各々と連絡を取りあい、自宅にいなながらも徐々に人脈を広げていったのだ。

十八歳になったとき、『フィギュアキング』に取り上げられたのをきっかけに、自らもフィギュアの制作および販売に関わりたいと考えるようになった。そして親父の仕事を手伝いながらも、主にネットを通じて地固めを進めていき、二十二歳でフィギュア事業部を立ちあげたのだ。趣味の延長であることはたしかだが、それと同時になにをつくれればどれだけ儲けるもうことができるかも、計算済みだったというのだから、まったくもって恐れ入る。

おなじ頃、恭平は小田原のプラスチック会社で、接待に明け暮れていたに過ぎなかった。熱海の芸者と結婚したものの、彼女の浮気現場を目撃して不能になってしまう始末だ。情けないことこのうえない。なんの実績も蓄積もないままに親父の跡を継ぎ、細々と商売をしているものの、職人は年寄りだらけ、十年先どころか五年先だってどうなるかわかったものではない状態だ。

ひろがえ
翻 　　つて弟は東南アジアのどこかにフィギュアの工場をつくるために、あちこちの国を飛び回っていた。もとより海外出張が多かったが、年が明けて二ヶ月ちよつとのあいだ、日本にいたのは延べ二週間弱だろう。これが決まって工場ができさえすれば、いままでの三倍の生産量となる計画だ。

もちろんフィギュア事業部の売上げは三倍になるってわけさ、兄貴。

一昨日なんとか連絡がつき、電話口で話す弟はずいぶんと鼻息が荒かった。恭平に話す間を与えることなく、立て板に水のごとく喋りまくると、じきに政府関係者とミーティングなんだ、日本に戻ったら結果を報告するよと一方的に電話を切ってしまった。

じつは話したいことがひとつあった。

フィギュア事業部ではトーキョーローカルサイキックなるアメコミのフィギュアの制作をするらしい。アメリカ本国の出版社から正式に依頼があり、弟は新進気鋭の人形作家、桜井桃枝さくらい ももえに協力を仰いだ。

桜井としてはやってみたい気持ちはあるものの、どうも弟の様子がオカシイ。この仕事について呼びだしておきながら、話したことと言えば、フィギュア事業部がどれだけ儲けているかといった自慢話に終始したようなのだ。不安を抱いた彼女は依頼自体、ほんとにあったかどうか、あったとしても、この仕事を進める際には、恭平にあいだに入ってほしいと頼まれたのである。

桜井に会ってすでに一ヶ月半近く経とうとしているが、結局、弟にはまだこの話をできずじまいだった。海外に工場をつくろうと奔走そうしているところに、話すことでもないように思えたものもある。一応、いつ日本に戻ってこられるのか、電話の直後にメールを送っておいたが、二日経ったいまも返事はなかった。

「またきまあす」「お仕事がんばってくださいあい」「今日はありがとうございましたあ」「さようならあ」「さようならあ」

「さようならあ」「バイバイ」「またねえ」

森岡人形の従業員一同は、去っていく小学生達にむかって手を振った。ついでしたが、会社の玄関口でみんな揃って集合写真を撮った。

「いつでも遊びにきていいから」「ぜひいらっしやいねえ」「待ってるわよお」

「はあい」「わかりましたあ」「かならずいきまあす」

阿波三姉妹の呼びかけに何人かが答える。三十数名の子ども達が角を曲がって見えなくなるまで、みんな会社に入ろうとしなかった。

「あれくらいのうちは、まだカワイイわねえ」

阿波三姉妹の長女、須磨子が名残惜しそうに言う。

「ほんとそうだ」

同意したのはすぐ近くにいた久佐間だ。子ども相手にデレデレとまでいかずとも終始、相好を崩しっ放しだった。いまでもその余韻が残っている。よほどうれしかったようだ。久佐間に限らない。阿波三姉妹に峰三郎、幸田佐吉、熊谷父子、パートのおばさん達もニヤニヤ顔のままだった。溝口もだ。きっと俺もそうにちがいないと恭

平は自分の頬を擦った。

だがニヤついているのもいまのうちだ。仕事場に戻ると、子ども達で騒々しいくらい賑やかだったのが一転、しんと静まり返り、なんとも言い難い寂しさを感じるにちがいない。毎年そうなのだ。

そんな中、ひとりだけニヤついていないひとがいた。着付師の遊木陽一だ。表情が硬くなっている。隣にはパートのひとりで、奥さんの松代もいた。彼女もニヤついていたのに、夫の顔を見て、伝染したかのようにおなじ表情になった。

「俺の孫なんか中学になったら、ウチにこなくなっちゃった」
久佐間がだれにとでもなく、ボヤクように言った。

「ちよつと前までは毎年、夏休みともなれば、ひと月はいたのにさ。東京に帰る日にはじいちゃんばあちゃんとお別れしたくないって、泣き叫んでいたくらいだ。いまじゃ、正月にだつてきやしない」

「ウチもおんなじよ」須磨子が憎々しげに言う。「マンション暮らしで猫が飼えないんで、おばあちゃん家で飼ってくれたらウレシイなんて孫が言うもんだから、飼いはじめた途端、こなくなっちゃって」
そんな理由で猫を飼っていたのか。

須磨子は十年以上前に夫を亡くし、ふたりの息子は東京で暮らしている。下の子は結婚していないので、孫は上の子の娘のはずだ。それにしても猫の数は半端ではない。ウチの中に五匹、通いが七匹

と溝口に聞いていた。須磨子の家の二階に暮らす彼女は、猫の世話もやらされているのだ。

「孫がいるだけ幸せでしょうが」

着付師の遊木陽一が吐き捨てるように言い、会社の中へ入っていった。それまでの朗らかな雰囲気が一気に冷めてしまう。

「いけない」「やっちゃまった」

須磨子と久佐間が自分達の失態に気づき、口を押さえたが、ときすでに遅しだ。

「いいんですよ」そう言ったのは遊木の奥さんだ。「ごめんなさいね。どうぞ気になさらないください」

遊木夫婦は子どもがいない。不妊治療をつづけたが、ついぞ子宝に恵まれず、ふたりの前では子どもや跡継ぎの話は御法度同然ごはつとだった。とくに夫のほうは、いまのように機嫌を損ねてしまうのが常だった。そのたびに奥さんがフオーするのである。彼女は夫のあとを追うようにしてビルへ入っていく。

「ほんとスウ姉さんったらあ」

須磨子を批判するように言ったのは、阿波三姉妹の三女、多香子たかこだ。

「私は悪くないわ。孫の話をしだしたのは久佐間さんだもん」

「面目ない」久佐間は頭を下げ、素直に詫わびる。「俺も愚痴ぐちのつも

りで言っただけなんだが」

「そうよねえ」と同意したのは阿波三姉妹の二女、勢津子せつこである。

「あれくらいのことではいちいち機嫌損ねられちゃあ、たまったもんじゃないわ」

「だけどセツ姉さん、遊木さんの気持ちを思ったらやっぱり」

「多香子はいいわよ。五歳の孫と毎日、いっしょでさ。さぞや楽しいことでしょうねえ」

「楽しくちやいけないような言い方しないでよ」

須磨子に負けずとも劣らない嫌味な口ぶりで、多香子は言い返す。

「多香子だって楽しいことだけじゃなくてよ、スウ姉さん」勢津子
「やはり嫌みな口ぶりで言う。「可愛い孫と暮らせるのも、お婿むこさんが甲斐性なしだからって、スウ姉さんも知ってるでしょ。東京で勤めていても稼ぎが少ないんで、家賃さえ満足に払えないから、お嫁さんの実家に転がりこんできたわけで」

「セツ姉さんだって、いい加減、お嫁さんとなかよくしたらどう？」
多香子が言った。声が甲高かんだかくなっている。「いっしょに暮らして十年以上経つっていうのに、三日にあけず喧嘩してさ。このあいだの土日も、お嫁さん、子どもを連れて実家に帰ってたんでしょ」

「そういう多香子のウチだって、旦那さんと甲斐性なしの婿さんのあいだで、ちよくちよく喧嘩してるじゃない」とこれは須磨子だ。

「はいはい、してますよ」多香子はすでにキレ気味である。「スウ姉さんは家族のいざこざに悩まされることなくて羨ましいこと」

「ほんとそう」多香子に勢津子が加勢した。「孫がきたがらないのもそうでしょうけど、要するに息子ふたりに嫌われてるのよ、スウ姉さんは。だからどっちも家に寄りつかなくなったんでしょ」

近所の人目がないとは言え、会社の前で揉めるのは勘弁願いたい。他のみんなも会社に戻らないで、三姉妹の諍いさかいを眺めていた。溝口さえも興味深そうにしている。高みの見物とはまさにこのことだろう。

「みなさん、じきに三時ですよ。もう一働きしていただかないと」
有なめるように言うと、阿波三姉妹は一斉に恭平のほうをむいた。
三人とも目が据わっており、恐怖さえ感じるほどだった。

「五代目はどうなんです？」
須磨子が喧嘩を売らんばかりに言った。

「どうってなにがですか」
「お世取よとりです」勢津子は神妙な面持ちだ。
なぜそれをいま言う？

これ以上言い争っていたら、お互いを傷つけるだけだと三姉妹は察したのだろう。長いこと姉妹をやっているので、引き際がわかっているのだ。かといって過熱した怒りはすぐには収まらないので、

その予先を揃^{ほこぎき}って恭平にむけてきたわけである。

まったくもってやれやれだ。

社長になってから、おなじ目に何度かあつてきたが、恭平としては諦めるしかなかった。自分が犠牲になることで、この場が収まるのであればやむを得ない。社長としての役目だと思えばいいのだ。それでも一応、反論を試みる。

「俺、バツイチの独身ですよ。お世取りどころか嫁もないのに」「真純ちゃんはどう？」多香子が言った。溝口のことである。「頭師としての腕はたしかだしさ。お嫁さんにもらえば一挙両得じゃない？」

「あたしは駄目ですって」

溝口は困り顔になり、胸の前で両手を振る。そこまで拒まなくてもいいのにと、恭平は思わないでもないが、「なに言っているんですか」と多香子を窘^{たしな}めた。

「五代目のなにがイケナイの？」今度は須磨子だ。「十歳以上も年が上だから、あなたにすればオッサンにしか見えないだろうけどさ。四十五と十年を重ねていけば、それぐらいの差、どうってことはないわよ。実際、ウチは八歳離れていたし」

「いまでこそ腹がでて、顎^{あご}の下に肉がついちゃったけど、これでも高校時代はポート部で、そりやもう超人気者だったのよ」褒めてい

ながらも、勢津子の口ぶりは恭平をからかっているようにしか聞こえなかった。「朝には決まって、このへんに女子高生が何人か待ち伏せしててね。五代目のためにお弁当とかお菓子とかをつくって、渡していたんだから」

昔のモテ話くらい虚しいものはないものだ。聞いてて辛くもある。「社長さんが素敵な方だとは思うんですけど、あたし、カレシがいるんで」

「嘘でしょ？」悲愴な声をあげたのは熊谷良隆だ。

「ほんとです」溝口はあっさり答える。「高校の同級生で、八年つきあって、お互い三十になるまでには結婚する約束もしています」「そりゃないよ」と良隆は肩を落とす。

恭平も平静を装ってはいいたものの、おなじ心持ちだった。溝口とどうこうなりたいという不埒な気持ちはなかったし、どうこうなれる身体でもない。それにしてもだ。

「なんでいままで黙っていたのさ」

須磨子が言い、阿波三姉妹が溝口に詰め寄っていく。

「だれもお聞きにならなかったのさ」

「いまの世の中、そういうのを訊いたら、セクハラになっちゃうんだから、訊けるわけないでしょ」と勢津子が突っかかる。

「だからって自分から言うのも変じゃありません？」

「どんなひと？」多香子は目を輝かせている。「芸能人だったらだれに似てる？」

そのときだ。一台のライトバンが目の前を通り過ぎていったかと思うと、すぐさまバックで引き返してきた。

「ここって森岡人形さんですか」

車窓から顔をだしたキンパツの男が、だれにとでもなく訊ねてきた。

「そうですが」溝口が答える。

「よかったあ。カーナビが壊れてて、だけどここのへんくればわかるだろと思ったんだけど、人形の会社だらけで、すっかり迷子になっちゃって」

「どちら様でしょう」これも溝口だ。

「社長さんと三時に約束した景浦かげうらです」

「あつ」多香子がキンパツの彼を指差す。「宮沢さんとこの娘さんの？」

「あ、はい。そうツス」

宮沢の奥さんは公子きみこという。十二年前に大病を患い、余命幾ばくもないとわかって、一人娘の舞まいは慌あわてて結婚式を挙げた。キンパツの男は彼女の旦那さんで、挙式あひらのときも羽織袴はおりはかまにもかかわらず、や

はりキンパツでピアスをしていたらしい。社長になる前のことで、
恭平はこの式にでていないのだ。

『西伊豆左官工房 一級左官技能士 景浦哲也』

社長室に案内すると、景浦が名刺を差しだしてきた。恭平も慌て
て渡す。

「西伊豆からライトバンでこちらまで？」

「仕事の道具が一式、あん中に入っているもんで。現場が麻布十番
でしてね。いまはそっからきました」

「左官職人さんだったんですね」

「工業高校の実習で左官をやったら、ハマっちゃいましたね。在学
中にいまの会社でバイトをはじめて、卒業後に就職して二十年近く
になります。一級の技能士の資格を取ってからもすでに七年くらい
になりますかねえ」

「すごいじゃないですか。たいしたもんです」

「いやいや、俺なんかまだ」

そう言いながらも、景浦はうれしそうに笑った。本人の話から計
算するに、恭平と変わらぬ年齢のはずだが、三十歳前後にしか見え
なかった。キンパツとピアスはもちろん、どこかまだヤンチャな雰
囲気が漂っているせいだろう。その割には仕事をマジメにこなして
いそうでもあった。背広姿だが、似合っていないというか、着慣れ

ていないようだ。

景浦から会社で電話があったのは昨日のことだ。義父について相談したいことがある、仕事で東京へいくので、明日の夕方に伺いたいのですがよろしいでしょうかと言われた。

いきなりなんだと思わないでもなかったが、恭平としても宮沢が心配だったので、二つ返事で了解した。ただしどろしてじつの娘ではなく、その旦那がくるのかは、少し引つかかった。おひとりですかと念のために電話口で訊ねてみたところ、そうですとの答えだった。実際、いまここには景浦しかいない。

「あ、そうだ」姿勢を正し、景浦は深々と頭を下げた。「この度は義父がご迷惑をおかけしまして、誠に申し訳ありません」

「迷惑だなんてことはありませんよ。宮沢さんはウチの大事な職人ですからね。私としては当然のことをしたまでです」

一月最後の日曜、宮沢は東京駅で倒れ、都内にある大学病院へ運びこまれてしまった。その病院から電話をもらったとき、恭平は日本橋の百貨店におり、すぐさま駆けつけたのである。ベッドに横たわる宮沢は、ミイラかと思うほど、包帯でぐるぐる巻きになっていた。

警察や病院のひと達に聞いた話によれば、宮沢は東海道新幹線の

ホームの階段を下っている最中、あと数段というところで足を踏み外してしまい、うつむけで倒れたらしい。それも顔面からだったせいで鼻骨と頬骨を折ってしまった。肋骨も数本ヒビが入って、右足首は捻挫ねんざをしていた。

やんなつちまいますよ、まったく。どんだけ酒を呑んでも、酔って怪我をしたことなんてないつうのに。

病院のベッドで宮沢は愚痴るようにそう言った。怪我をしたとき、彼はシラフだったのだ。

それにしてもなぜ東京駅に、それも東海道新幹線のホームにいたのか、宮沢本人はけっして語ろうとしなかった。恭平も訊かなかったが、すぐにピンときた。一人娘が嫁いだ先が西伊豆なのだ。これまで宮沢が娘のもとを訪ねた話は聞いたことはない。でも他に考えようがなかった。恭平だけではない。職人達もきつとそうにちがいないと口々に言っていた。

大学病院に三日程度いたあとは、鐘撞市内の総合病院へ移り、一週間もしないうちに自宅へ戻されて、ひと月が経つ。全治にはまだ、時間がかかりそうだった。そして病院の手配や支払い、各所への移動、入院中の服や日用品などの準備は、ほとんど恭平がおこなったのである。迷惑ではないが、面倒ではあった。

自宅で療養することになってからは、職人達が代わりばんこで足

を運び、炊事洗濯掃除をしていた。

「よかったらみなさんでお食べください。ウチの近くに加山雄三ミュージアムがありますね。そこのお菓子なんです。けっこうオイシイッスよ」

そんなミュージアムなんてものがこの世にあるのかと思いつながら、菓子折を恭平は受け取った。

「あと、これも」 つぎに景浦が差し出したのは茶封筒だった。なにかと思いつ、手に取ってすぐにお金だと恭平は気づいた。「わずかで申し訳ないのですが。もし足りないようでしたら、おっしゃってください。いまずぐは無理ですが後日必ず」

「こういうのを受け取るわけにはいきません」

「どうぞ義父の代わりにお受け取りください。そうしていただかないと俺の気が済まないんです。お願いです」

「だったら宮沢さんに直じかに」

「渡そうとしたら、叩き返されました」

「いつの話です？」

「ここへくる前に、義父のところへ寄ってきまして」

「宮沢さんには会ったんですか」

「玄関口で。中にはあげてもらえませんでした」

景浦は眉毛を八の字に下げ、眉間に皺しわを寄せている。こうまで困り果てたひとの顔を見るのも滅多めったにない。

「東京駅で怪我したとき、宮沢さんは景浦さんの家からの帰りだったんですかね」

「義父からその話を聞いていませんか」

「まったく」

「そうですかあ」景浦は深いため息をつく。「義父はあの前日、西伊豆の我が家にきていました」

「一泊したわけですか」

「その予定だったんです。ウチは賃貸マンションで2LDKと狭いんですが、それでも義父が寝る場所くらいはどうかつくって、布団まで借りていたんですよ。でも結局は駅前のビジネスホテルに泊まったようです」

「なにがあったんです？」

他人の家のことである。クビを突っこむ気はないにせよ、そう訊かずにはいられなかったのである。

「俺の妻と義父の関係が、ギクシャクしているのはご存じですか」

「なんとなくは」阿波三姉妹から聞いたのだ。

お母さんが六十歳手前で、大病を患わずらって亡くなったのは、ぜんぶお父さんのせいだわ。

「事あるごとに妻はそう言うんですよ」それが自分の責任かのよう
に、景浦は苦渋な表情で言った。「義母の具合が悪くなってからも義
父は^{いたわ}労るどころか、年中呑んだくれば深夜二時三時に帰宅してい
たとかで。義母としてはそれまで起きて待つてなくちやいけない。
体調を崩して床に^ふ臥していようものなら、義父は引きずりだして、
晩酌の準備をさせたことも年中で、見るに見かねた俺の妻が止めに
入ると、父親に逆らうとは何事かと、鉄拳が飛んできたくらいで」
酒癖の悪さは知っていた。そのせいで新入社員が^{きよくしん}つぎつぎとやめ
てしまったからだ。だがさすがに社内では暴力を振るうことはなか
った。

「そんな義父に対抗するために、妻は中学から^{きよくしん}極真空手を習いはじ
めたんですよ。高校ともなれば、酔って暴れる義父をねじ伏せたら
えに、ときにはウチから叩きだしていたそうで、まったくもつてた
いしたもんです。いまも十一歳の娘を連れて、道場に通っています
てね。間違っても逆らわないようにしています」

どんな家にもそれぞれ事情がある。それでもみんな、なんとかし
て日々を暮らしているわけだ。

「でもまあ、義母が亡くなって十年以上が経って、今年の夏には十
三回忌になります。義父も七十歳を過ぎたことですし、このへんで
仲直りをしたほうがよくないかと妻に提案したところ、あなたがそ

ういうのならばと承諾しましてね。義父を西伊豆に招いたんです」
景浦がライトバンで鐘撞まで迎えにきて、西伊豆に着いてからは、娘と孫が合流し、あちこち巡ったのだという。思いのほか、宮沢はご機嫌だったらしい。

「加山雄三ミュージアムはたいそう気に入っていただきましてね。
若い頃、ファンだったそうですよ」

宮沢さんが若大将のファン？

俄にわかに信じ難い。しかし宮沢のプライベートをまるで知らないことに恭平は気づいた。

「ウチで夕飯をご馳走しまして、そのときは義父自ら酒はいらないとおっしゃって、なかなかイイ感じだったんです。お風呂も入ってもらって、あとは寝るだけというときに妻と義父が言い争いをはじめちゃったんですよ」景浦はふたたびため息をつく。「発端は俺といえ俺でして。義父にいつしよに暮らしませんか、なんだったらこのへんに一軒家を購入しますよと言ったんです。そしたら妻が鐘撞の家と土地を売ったらどうかと」

「宮沢さんに言ったんですか」

景浦は力なく頷いた。

「最初っからその話をするつもりだったんだなと、ブチ切れられちゃったんです。先祖代々の土地を売る気などない、ふぎけるのもた

いがいにしろと、マンションをでていったんです。夜中の十一時で、電車はないし、帰る手だてはありませんよと引き止めたのですが、だったら駅前のビジネスホテルにでも泊まると言い張りまして」

思うに宮沢の指摘どおりだったのだろう。景浦夫婦としては一軒家を購入するのに、鐘撞の家と土地を売ってほしい、そのためにまづ父娘の関係を修復しようと試みたのではあるまいか。

こうして景浦がひとりで訪れたのは、彼こそが西伊豆に一軒家をもちたいと考えているからか、あるいはあんたのせいでお父さんが怒ったのだから、あんたがなんとかなさいよと、極真空手の使い手である奥さんに脅おとされたのかもしれない。

「それと義父が言うにはですよ、職人としてはまだまだ腕は衰えていない、森岡人形にとって俺はなくてはならない人材だって息巻いていたんですが、実際のところ、どうなんでしょう？」

「宮沢さんが嘘をついているとお考えなんですか」

「とんでもない」景浦は首を横に振った。「そんなことは言っていないですよ」

「本人が言うように宮沢さんは我が社にとって大切な人材です」

「だけど義父は今年で七十六歳ですよ。そんな高齢者をいつまで働かせるつもりですか」

「働いていただいているんです。あなたもジャンルはちがえども職

人ならおわかりでしょう。いくつになっても、より高みを目指して
いかねばならない。職人は生涯、職人なんですよ」

おまえが職人を語るな。

だれかが耳元で囁く。ただの気のせいだ。でも恭平にははっきり
聞き取ることができた。

〈つづく〉